

凌ぐという言葉

昨年の3月11日、東日本を襲った大津波に言葉を失いながら、20年以上の付き合いであり、私が心から信頼し尊敬する「仙台つどいの家」の下郡山和子施設長と利用者の方々の安否が一番に頭に浮かんだ。勿論電話は通じず、3日後、やっと「みんな無事だよ」という彼女の声を携帯電話で聞いたときには涙があふれた。幸い「つどいの家」は直接津波には襲われることはなかったが、地震による液状化で建物は半壊、危険で中は使えないこと、職員の中には被災した人がいること、ガスが使えないこと、水がないことなど大まかな事情を聞くことが出来た。

日頃の優れた実践と、全国の仲間との誠実な付き合いがあったことで「つどいの家」には多くの物心両面の支援が集まった。十愛療育会も力になりたいと義援金箱を法人3事業所に置き、数人の職員に支援に出向いてもらった。

あれから9ヶ月、やっと一部の利用者が寒さを逃れる仮の小さなプレハブはできたものの、多くの利用者はまだ、あちこちの建物の一部を借りてのキャラバン生活が続いている。本格的な復興はまだまだ先、見通しも立っていない。

そんな中で送られてきた「とんがらし通信」、下郡山施設長が書いた文章のタイトルに「凌ぐ」とあった。まさに被災した人たちは懸命に今を「凌いでいる」のだ。「凌ぐ」しかないのだ。そう思いながらこの「凌ぐ」という言葉がここに深く食い込んできた。

「津波被害でなにもかもなくした人々、原発に怯えながら日々難儀を凌いでいる人々に比べれば、私たちが凌ぐことは小さなことだ。私たちは復興を諦めない。時間が希望を与えてくれるはずだ」こう文章を締めくくった下郡山施設長、「凌ぐ」という言葉は同時に優しさと大きな勇気を伴う言葉だと知った。決して3月11日を、今を「凌いで」いる人々を忘れてはならない。

平成23年12月

理事長 日浦美智江